

阻碍較多。但为了使我們的眼界扩大一些，为了使我們的艺术爱好广泛一些，我們應該能够欣賞各种各样的好詩，包括比較难于欣賞的好詩。

抜き書きながら原文を引いたのは、さきに紹介した『李賀詩選』『唐詩選』『唐詩選析』などがみな、李賀解説では何氏の説をお手本にし、部分的には何氏の文をほとんどそのまま使っているらしいことに気づいたからだ。何氏の本を先に読んでいたら手間が省けたのに、とも思わぬではないが、手間をかけたので、いまの中国で出るこの種の本の書かれる過程についてある示唆を得た、ともいえる。

何氏の文章は注意ぶかく書かれてあって、「缺点」や「弱点」をもつ詩人の作品へも歩み入ることゝ終かに温かく誘いかけてゐる。何氏に学んだらしい人たちの方は、何氏よりも割り切りがた切りすてかたにおいて、やや果敢であるように感じた。

何氏は、あまり遠くない過去時に逝世されたようである。謹しみて追悼する。

「光明日報」から

1930.5.17.

雅記 112

一九三九年五月十九日、三段通しの見出しに「新翠舞衿淨如水」とある。李賀「十二月樂辞・三月」の第四句だ。丁宇という人の、ロンドン・チェリー・バレー団来演についての観劇記だった。李克瑜という人のクロッキーとあいまって、当日の舞台と観客の感動が目にはぼるようだった。ただ、記事中に李賀の名は出て来ない。丁氏が賀の集の愛読者なのか、あるいは、新『唐詩選』で読んで心に触れたこの一句を早速つかったのかわからないが、いい見出しだった。記事の内容

にびつたりの。

同年十一月七日「文学」第一五二期「文学史漫話」に吳汝煜、李穎生「詩人早慧、与快出人オ」がこれまた三段見出しで出ている。

中国の文学史上、早熟の詩人が少くない例として王維、白居易、王勃、李賀などを挙げ、文芸創作方面では才能を早期、短期に發揮させることは可能であり、そのためには多量の読書と、刻苦精勵と、先輩の育成援助が必要だ、といっている。

「こういつたからといって生活の作用を否定するのではない。豊富な生活体験と動乱不安の時代がわが国古代の早慧詩人の多くを形成したのだ。李賀がもし『夏日長飢小甲蔬』の苦辛をいやというほど嘗めていかなかったら、『感諷五首』其一や『老夫采玉歌』など労働人民の悲慘な境遇に同情する好詩はできなかったらう」

一九八〇年一月二十日、谷水「但願後人知李憑」

李賀の「李憑箏篋引」を読み、楊巨源の「聽李憑彈箏篋二首」（顧況の）「李供奉彈箏篋歌」を読むと、

李憑がすぐれた演奏芸術家であり、社会的地位も高く、名声もあったことがわかるが、その名は史籍には見えない。封建社会では演奏芸術家は皇帝など権力者の玩弄物にすぎなかった。詩人、作家、画家は作品が残るが演奏芸術家は、命が終れば苔も花のように散る。新中国では林彪、四人組時代を除き、演奏家は党と人民に尊重されているが、かれらの技芸身世の記録は「寥トシテ晨星ノ如シ」かれらのため伝を立て、また作家、詩人諸氏が唐代諸詩人のように演奏家の芸術を描写してほしい。云云。

わたしは谷氏の説に同感である。以下は無いものねだりのようではすかしいが、演奏芸術家であつたはずの蘇小小の非運を歌つた李賀の作が顧りみられないこと、あるいは續齊の歌として退けられてゐることに對しての、演奏家であらう谷氏の意見が聞きたかつた。彼女の名ももとより史籍にはなく、その名も、清泰によつてではなく、その非運によつてのみ伝えられているのだ。演奏家としては、これは二重の非運ではなからうか。もつとも、皇帝や宰相等の名が人々の記憶から消え去つても彼女の名は民衆の胸に生き続けたのだから、考え方によつては、非運とはいえない。権力の所在の変化によつて書き換えられる史書なんぞに名をとどめたところでも、さしたる名誉ともいえないだろう。

李 賀 詩 歌 集 需 要 校 勘

1980.5.17

雑記113

林同済「李賀詩歌集需要校勘」は一九七八年十二月十三日の『光明日報』に載つたそうだが、わたしは見えていない。『新華月報』（文摘版）一九七九年二月号に載つた縮約を読んだ。

林氏は十数年来、宋・金古本を含む二十余種の李賀詩歌集の古今版本を校閲している由で、これはその校記の若干である。

「最近、上海人民出版社が発行した『李賀詩歌集注』は、実際は一九五九年中華書局編集の『三家評注李長吉歌詩』の重版だ。同じでないのはただ編集上、清代王琦の彙解部分を各詩の後に移しただけで、校勘の角度についていえば、完全に王琦の旧態によりかかつてゐる」林氏は、この「現行本」がよりよいテキストとなるためには厳密な校勘が必要だ、という。

「開窓歌」に検討すべきもの三ヶ所。

題下に「花下作」と注し「旧本に『華下』とするが誤り」という。「華下」は無意義だから、はっきり間違いだ。だが「花下」では第一句の「秋風吹地百草乾」とそぐわぬから、宋本に従って「華下」とし華山の下と解さねばならぬ。(この点け、荒井健・鈴木虎雄・斎藤暁の三注いずれも「華下」とする)

第二句「華容碧影生晚寒」の「華容」は「華岩」の誤りだとし『水経注』の「華崖本一山当河……河神巨靈……開而為面、今掌足之迹、仍存華岩」をその根拠とし、かつ「山容」の語はあるが個有の山名と容字を結ぶ漢語の用法はない、という。

結句「暮受俗物相填蔽」の「填蔽」は「蔽」字が広韻中になく「填」と結んで語を成し難い。管益、姚文燮刻本は「填蔽」とし、王琦は「填蔽」かというがしっくりせぬ。『唐音統義』は「蔽」は「蔽」字で相撃つこと、という。『字彙補』に「蔽は扈と同じ」という。宋本、金本にすで「蔽」としているから保留するのがおだやかだが、『統義』『字彙補』を採ってよいとすれば「扈蔽」あるいは「扈蔽」だろうか。蘇軾「送蔡冠卿知饒州」に「吾親蔡子与人游、扈蔽笑語無不可」諸浪評議の意である。李白の「蜀道難」に「飛湍瀑流爭喧」喧嘩衝突の意である。

つぎ「野歌」の第三行「麻衣黑肥衝北風」

「絶好の詩句中に突然、黒肥、兩字が闖入して来る。悪考でことばをなすめ。んを吐出して文字を煉る習わしだった李賀がなぜこんなことになるだろう」

「麻衣」については王琦が「唐時拳守の服」云々のが正しいが「黒肥」を「垢膩の状なり」というのはこじつけだ。「黒肥」は「黒肥」のあやまりだ。『広韻』に「肥は穢なり」といふ二

『儀実録』に「古け髪髻の三尺なるを以て頭を裹む。頭巾と号す。三代は皆な列品に冠し、黔首は
皂綬を以て髪を裹む」『朱子語錄』に「唐の人の頭巾は、もとけ紗だけ用いた」黒髻は黒色の頭
巾で平民の用いるもの。「麻衣黒髻」はみな官吏登用試験受験生の服だ。李賀のこの詩では、こ
の文字で自己の落拓として志を得ぬ情景を説明しているのだ。「千二百年の間のウヤムヤがいま解
決したといえるかどうか。李賀が知たら、あるいは地下で微笑してうなずいてくれようか」

子 殺 し

1980.5.18.

雑記 114

今朝の『朝日新聞』の書評欄に杉山幸丸『子殺しの行動学』の紹介が出ている。無署名のその
文によると、ハヌマンというオナガザルは十数頭が群をなす。どの群にも雄は一頭しかいない。
あぶれた雄が群を乗っ取ることがある。そのさい雌の抱いている赤ん坊、つまり前任者の子は新
しい雄に噛み裂かれてしまう。乗っ取りは平均四年以下に一度づつ生じるがそのつど常に赤ん坊
みな殺しがおこる。

これを読んでいて反射的に思い出したのは、唐の太宗が兄建成、弟元吉を討ったのち、その子
らを皆殺しにしその妻妾を掖庭に入れた（つまりおのれの妾とした）ことだ。

短絡的連想と笑われそうだが、わたしとしてはサルと人間とがあまりにも短絡的に類似する行
動に出ることに驚いているのだ。

サルが消滅して人間が生じるのではなく、サルのうちの何かが失われ何かが加わって人間にな
るのだろう。何が失われ、何が加わったのだろうか。

昨日のテレビニュースは中国での劉少奇氏の追悼会の模様を報じた。今朝のラジオニュースは韓国での金大中氏らの逮捕を報じた。

両字之差

1980.5.18.

115

『復旦學報』^{（利金科学版）}一九七九年第四期に章培恒「再論李賀詩歌与形象思維」答王文生同志」と林同濟「兩字之差——再論李賀詩歌需要校勘」が載っている。章氏のは一九七八年七月二十一日の『文匯報』に載った「從李賀詩歌看形象思維」に続くもの。前篇を見ていないのと、『武漢大學學報』（社会科学版）一九七九年第二期に載ったという「再論古代文學中的形象思維問題——与章培恒同志商榷」を見ていないので（見る）ことができなかった、というほうが正確だが、名を挙げるだけにし、林氏のを紹介する。

「金銅仙人辭漢歌」は唐末張為の『詩人主客圖』に引述され明初の書家宋克の『草書唐人詩卷』に尊録された。千年來、詩壇・藝術界でいかに推崇されたかがわかる。「天若有情天亦老」の句が毛主席の妙手に活用されてのち、数年來「評論家更是有口皆碑」（評論家がさらに口々にほめた文）だが待て！李賀のこの詩には大いに問題のある兩字がある。明らかに間違っていた。千年來たれも指摘せず。みんな鵲呑みにしたままで、いいね、すばらしい、と毒をそろえる。いまは誤りがあれば改めるべき時だ。

（一）第三句「画欄桂樹懸秋香」の「秋」字は「枯」字の誤りだ。「秋香」では第一句の「秋風客」と重複し、第四句「三十六宮土花碧」の情景とそぐわない。「新夏歌」に「落蕊枯香数分

在」とあるから「枯査」は李賀の語彙中の語。事件は農曆八月で桂花は盛時を過ぎていて「枯査」というにふさわしく、詩中の「酸風射眸」「青嶺客過」ともよく合う。草書の「秋」と「枯」は酷似し、李賀は好んで「疾書」したというから、写字工が写し誤ることはあり得る。

(2) 第十一句「携盤独出月荒凉」の「出」字は「去」字の誤りだ。歴代の評論家は李賀の言葉に目がくらんで「長吉の理ニ短ナリ」などと論するが、その実、賀の詩の長所は正に奇理の中に条理を寓し、頓挫の内に停当を成しとげているところにある。(停当はびったりしていることというほどの意)かれもほかにもキズがないわけではないが、決しておそまつではない。「独出」は現存の古今本に一致はしているが、なれた粗末だ。まず第7句の「出宮門」の「出」と重複する。「去」は長安を離去し、長安を請去するのだ。さきに宮門を出るとき、ただ月のみ照していたので「空しく將に」であり、長安を「去」るとき、悲しさが更に深かったのも月に「荒凉」(加えたのだ。「去」字はこの関頭における吃緊の關鍵、一たび去って還らぬ去だ。これは最後にふりかえったときほどばしり出た血涙で、ただ「去」字のみがわずかにこの時の辞藻の悲情を現しうるのだ。「出」字とその差は千里。陶潛「乞食」の「飢來驅我出」の「出」を一本が「去」とし蘇軾の「風水洞」の「世事漸難吾欲去」の「去」を一本が「出」と誤るように両字はまぎれやすい。

以上の要約では意を尽さぬが、この紹介で興味を覚えられた方は原論文を読まれるだろう。わたしは拙稿「金銅仙辞藻歌」を書いたとき、序の青龍「九」年あるいは「元」年の「三」年なるべきことを考証したが、林氏の指摘する二字には気づかなかった。さきの問題とともに、熟

考したい。また林氏の校勘の全貌が近い将来に出版されることを熱烈歓迎する。

巧奪天工

1980.5.18

雑記 116

甘肅師範大学中文系編『漢語成語詞典』を開いたらその頁に「巧奪天工」があって「人工的精巧勝過天然、形容技藝巧妙」と説明してあって、『採蘭雜志』の記事が節略抄出してある。

『採蘭雜志』^は撰者、撰時、ともに不明だが、中の記事からみて宋代以後のものであることは確かだ。さて問題の記事を『古今說部叢書』第二集から引く。

甄后既入魏宮、宮庭有一綠蛇、口中恒有赤珠若梧子、不傷人、人欲害之、則不見矣、每日后梳粧、則盤結一髮形於后前、后異之、因效而爲髻、巧奪天工、故后髻每曰不同、号爲靈蛇、宮人擬之、十不得其一二、

面白い話で、李賀が聞いたら喜びそうだが、「巧奪天工」の典故がこれに違いないとして「巧奪天工」そのものは李賀の「筆補造化天無功」から點化した言葉ではないだろうか。

李賀 秦宮詩 補注

1980.5.19

雑記 117

『中華文史論叢』第八輯（一九七八年十月上海古籍出版社刊）に段熙仲「李賀《秦宮詩》補注」が載った。

一、「又云昔有之詩」長吉の小序のこの語についての旧解はまわりくどい。序の意は「秦宮詩」を作って馮子都の事と対称した、というようだから、（馮子都の事を歌った）辛延年《羽林郎》

の起句「昔有霍家奴」のはじめの二字をとって、この詩に題して「昔有の詩」といったのだ。

二 「内屋浮屏生色畫」王琦は「生色とは画が鮮明で、色像が生きているようなもの」というが、こじつけた。玄扈の「一切経音義」の「瑜伽師地論」卷二十五に「生色」の一糸があつていう「生色ハ即チ金ナリ。生ズルハ便チ華色ニシテ変改ス可カラザルヲ言フナリ」(慧琳「一切経音義」卷四十八のこの論の注は玄扈の義を用いた)これによれば、深屏は屏風で生色画は金の画、つまり黄金で画いた屏風。枕屏風にも画ける。こういう精麗の手工芸品は晩唐、五代の豪貴の家にもあつて「花間集」の温飛卿に「画屏金鹧鸪」「金鸭小屏山碧」「韋端己に「閑掩翠屏金鸂」などの詞句がみえる。

Li Ho, by Kuo-Ching Tu

1980.5.19.

雜記 118

一九八〇年三月三十一日 航空便で送られた「Li Ho」を受けとった。

SANTA BARBARA / March 25, 1980 / Professor Harada : / This book is sent to you with the compliments of the author / UNIVERSITY OF CALIFORNIA / スタンプした紙片がはさんであった。著者は杜國清氏だ。1/6 本は TWAS 即ち Twayne's World Authors Series の第五三七冊。この叢書の中国の部の編集者セリグン・大学 S. William Schultz 氏。出版一九七九年。一六五頁。内容に About the Author / Preface / Acknowledgment / Chronology / 1. The Weary Dream of a Delicate Swordsman: A Biographical Sketch / 2. Light and Shadows: His Worlds / 3. A Kaleidoscope of Imagery and Euphony: His Language / 4. Li Ho's *Hsueh-tszai*: An Evaluation of His Poetic Genius / Notes and References / Finding-List of Titles

of Li Ho's Poems Mentioned in the Text / Selected Bibliography / Index 著者紹介に次の通り
Kuo-ching Tu, born Taiwan, 1941, received his B.A. in English literature from National Taiwan University, M.A.
in Japanese literature from Kwansai Gakuin University, Japan, and Ph.D. in Chinese literature from Stanford University.
He is Assistant Professor of Eastern Languages and Literatures, University of California, Santa Barbara. He has
written and published four books of his own poems and translated T.S. Eliot's *The Waste Land*, Charles
Baudelaire's *Les Fleurs du Mal* and James J. Y. Liu's *The Art of Chinese Poetry* into Chinese.

序言では、李賀の文学史上における位置と詩の特徴、賀の死後から今日にいたる研究史を
中国・日本・欧米にわたって簡潔に述べる。欧米と台湾の研究についての記述が比較的くわしい。

The present volume is the synthesis of my prior studies of the works of Li Ho and I owe much to the insights of
previous scholars, but at the same time I would like to think that I may have contributed some valid interpretations
of my own. This study is intended as an introduction to these poems for the general reader and an extensive
bibliography in primary sources and in English is provided for those interested in further pursuing the subject
of Li Ho's life and works. For myself, this book is only the beginning of more intensive study and original
research in the future.

この本についての概括を、これまた簡潔に記す。わたしは『李賀研究』の本号にとりかかった
つもりで、この本をゆっくり読むことができない。だから批評はできない。卒読の感想だ。

文中に挿入された李賀の詩の訳が、これまでに出た英訳よりも、原作に近い長々で訳される。
その点に感心した。訳に注釈的説明が少なく、結晶度が高い、と感じた。例えば「蘇小小歌」

Song of Su Hsiao-hsiao (Tu)

Su Hsiao-hsiao's Tomb (T'odhan)

Dark orchid dew
Like tearful eyes;
Nothing with which to knot two heart
Misty flowers cannot bear cutting.

Dew upon lonely orchids
Like tear-brimmed eyes.
No twining of love-knots,
Mist-wreathed flowers I cannot bear to cut

Grass as a cushion,
Pinetree as a canopy;
The wind for clothing,
The waters for jade-pendants;
In the varnished carriage
Long waiting;
A cold emerald candle
Consuming its light.

Grass for her cushions,
Pines for her awning,
Wind as her skirts,
Water as birdle-jades.
In her oil-silk carriage
She is waiting at dusk.
Cold candles, kingfisher-green,
Weary with shining.

Below West Plownd,
Wind and rain blow.

Under the Western Grave-mound,
Wind-blown rain.

Das Lied der Su Siu-siau (Dabon)

The Grave of Little Su (Graham)

Auf heimlicher Orchis der Tau,
Gleich meinen Augen, die weinen.
Kein Wesen, das dem Herzen sich verbindet:
Im Dunst die Blüte widersteht dem Schnitter.
Gräser gleichsam ein Kissen,
Kiefern gleichsam ein Schirmdach;
Wind mein rauschendes Kleid,
Wasser mein Gürtelgehäng:
Im Wägen mit prächtigen Wänden
Hab ich deiner gewartet.
Kalt die bläuliche Fackel,
Vertan ihr buntes Gefunkel.
Unter dem westlichen Hügel
Peitschen Winde den Regen.

Dew on the secret orchid
Like crying eyes.
No thing to bind the heart to.
Misted flowers I cannot bear to cut.
Grass like a cushion,
The pine like a parasol:
The wind is a skirt,
The waters are tinkling pendants.
A coach with lacquered sides
Waits for someone in the evening.
Cold blue candle-flames
Strain to shine bright.
Beneath West Mound
The wind puffs the rain.

「た」は、英語やドイツ語の語を味わう力はなにか、ノミも批評をアツクするのではなく、